

III. 実践研究(地域の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究:2024年度)

1. 江戸川区の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究

2024年度の実践研究実施に向けた準備段階として2023年度に施設ネットワーク検討会議を設置してモデルプログラムを作成、2024年度にモデルプログラムを実施した。

(1) 施設ネットワーク検討会議の開催(2023年度)

江戸川区におけるサテライト施設、地域のその他社会資源の実情を把握し、施設ネットワークを実現するにあたっての問題点、課題を明らかにし、モデルプログラムを作成するために施設ネットワーク検討会議を設置した(図表3-1)。

**図表3-1 江戸川区施設ネットワーク検討会議委員
(所属は2023年度調査時。敬称略、50音順)**

氏名	所属
上山亜紀子	東京都生活文化スポーツ局スポーツ総合推進部パラスポーツ課課長
笈川晋一	江戸川区文化共育部スポーツ振興課課長
大磯園子	東京都立鹿本学園PTA代表会長
佐々木ゆみ	東京都障害者スポーツ協会スポーツ振興課課長
佐野敏勝	江戸川ろう者協会理事長
山田勝之	江戸川区総合体育館館長

(2) 江戸川区モデルプログラム作成(2023年度)

2024年度の実施に向けて、施設ネットワーク検討会議で議論を重ねた(図表 3-2)。具体的な作成プロセスは以下の通りである。

- 1) 対象者である鹿本学園の生徒と保護者のニーズを聞き出す(①②⑧)。
- 2) 事務局でモデルプログラム素案を作成する(③⑤⑦⑨)。
- 3) 施設ネットワーク検討会議で実践に向けての意見交換を行う(④⑪)。
- 4) 該当する関係者から都度意見を聞く(⑥⑩)。

なお、プログラムが終了した翌年度以降を見越して、日常的に親子で施設を利用できるよう生徒と保護者が一緒に参加する形態とした。

図表 3-2 江戸川区モデルプログラム作成プロセス

日付	内容	対応者
2023/12/4	①鹿本学園PTAに実態把握のヒアリング	鹿本学園PTA／事務局
2024/1/10	②鹿本学園PTAにプログラムについての懸念点、障壁などをヒアリング	鹿本学園PTA役員／事務局
	③プログラム案_Ver1.0を生成	事務局
2024/1/19	④施設ネットワーク検討会議で議論	施設ネットワーク検討会議委員
	⑤プログラム案_Ver 1.1を生成	事務局
2024/2/15	⑥プログラム生成会議（具体的内容、日程）	江戸川区バラススポーツ係 江戸川区総合体育館 東京都障害者スポーツ協会
	⑦プログラム案_Ver 1.2を生成	事務局
2024/2/26	⑧鹿本学園PTAに案_Ver 1.2をもとに意見交換	鹿本学園PTA役員／事務局
	⑨プログラム案_Ver 1.3を作成	事務局
	⑩現場で指導する総合SC担当者との意見交換	東京都障害者スポーツ協会／事務局
2024/3/22	⑪施設ネットワーク検討会議で最終案の議論	施設ネットワーク検討会議委員

(3) 江戸川区モデルプログラム概要(2024年度)

モデルプログラムの目的は以下の通りである。

- 1) 保護者と一緒に参加してもらい支援方法を経験してもらう。将来的には、ヘルパーなどに支援方法を伝え、スポーツ活動の際にはヘルパーに同行してもらい保護者のレスパイト(日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る)につなげる。
- 2) 東京都障害者総合スポーツセンターの職員(専門職)と江戸川区総合体育館のスタッフが一緒に指導していくなかで、最終的に江戸川区総合体育館のスタッフが重度障害者を指導できるようにする。
- 3) 理学療法士が補助する公民館(区民館、コミュニティ会館等)の既存プログラムに参加するなかで、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢を増やす。

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-3の通りである。第1フェーズの実施場所をハブ施設、第2フェーズの実施場所をサテライト施設、地域のその他社会資源とした。

第1フェーズはハブ施設である東京都障害者総合スポーツセンター(第1回、第2回)で実施、第2フェーズは江戸川区内のサテライト施設である江戸川区総合体育館(第4回、第5回、第8回)、地域のその他社会資源である小岩アーバンプラザ、東部区民館、中平井コミュニティ会館、葛西区民館(第3回、第6回、第7回)を会場とした。

実際には、参加者の居住地と交通アクセス等を考慮した結果、地域のその他社会資源の会場として利用されたのは小岩アーバンプラザと東部区民館であった。参加者と保護者は図表3-4、モデルプログラム実施概要は図表3-5にまとめた。

図表3-3 江戸川区モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回	実施回	第4回／第5回／第8回
施設形態	ハブ施設	施設形態	サテライト施設
会場	東京都障害者総合スポーツセンター	会場	江戸川区総合体育館
		→	
		実施回	第3回／第6回／第7回
		施設形態	地域のその他社会資源
		会場	<ul style="list-style-type: none">・小岩アーバンプラザ・東部区民館・中平井コミュニティ会館・葛西区民館

图表 3-4 江戸川区モデルプログラム参加者(所属は 2024 年度調査時。敬称略、五十音順)

参加者名	所属	保護者名
道解真人	東京都立鹿本学園 高等部 1年	道解麻由美
平田友吾	東京都立鹿本学園 小学部 2年	平田絢子
山田稟子	東京都立鹿本学園 中学部 3年	山田靖子
吉野叶恋	東京都立鹿本学園 高等部 1年	吉野純子

图表 3-5 江戸川区モデルプログラム実施概要

フェーズ	回数	日時	会場	主指導	指導補助	備考
第1フェーズ	第1回 第2回	① 2024/6/22(土) 13:30-14:30	東京都障害者 総合スポーツセンター プール	・東京都障害者総合スポーツセン ター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん	・パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ	既存教室「重度障害者のため のプールひろば」を活用
		② 2024/6/29(土) 13:30-14:30				
		③ 2024/7/20(土) 14:45-15:45				
		④ 2024/8/12(祝) 13:30-14:30				
		⑤ 2024/8/25(日) 13:30-14:30				
		⑥ 2024/9/23(祝) 13:30-14:30				
第2フェーズ	第3回	2024/10/12(土) 10:00-11:30	東部区民館	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士（東京都理学療法士協会） ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
		14:00-15:30	小岩アーバンプラザ			
	第4回	2024/11/24(日) 9:00-12:00	江戸川区総合体育館 プール	・東京都障害者総合スポーツセン ター職員（専門職）	・江戸川区総合体育館スタッフ	新規事業として実施
	—	2024/11/24(日) 13:00-17:00	江戸川区総合体育館 研修室	・東京都障害者総合スポーツセン ター職員（専門職）	【えどがわパラスポーツアンバサダー向け研修会】	
	第5回	2024/12/15(日) 11:00-11:45	江戸川区総合体育館 アーチェリー場	・江戸川区総合体育館スタッフ	・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「なかよし運動教 室」を活用
	第6回	2025/1/11(土) 10:00-11:30	東部区民館	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士（東京都理学療法士協会） ・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
	第7回	2025/2/8(土) 14:00-15:30	小岩アーバンプラザ	・江戸川区総合体育館スタッフ	・理学療法士（東京都理学療法士協会） ・えどがわパラスポーツアンバサダー ・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	既存教室「パラスポーツ初心 者教室」を活用
	第8回	2025/3/20(祝) 9:00-12:00	江戸川区総合体育館 プール	・江戸川区総合体育館スタッフ	・東京都障害者総合スポーツセンター職員 (専門職)	新規事業として実施

(4) 江戸川区モデルプログラム詳細(2024年度)

江戸川区モデルプログラムの詳細を各回でまとめた。ハブ施設である東京都障害者総合スポーツセンターで行われた第1フェーズ(第1回、第2回)を図表3-6、3-7、3-8、3-9、3-10、3-11に記載した。第1フェーズは、参加者の状態をより詳しく把握するために、教室1回に対して親子1組の参加とした。参加親子3組がそれぞれ2回ずつ教室に参加できるようにしたため、第1フェーズの教室回数は合計6回となっている。

会場を江戸川区内の施設に移した第2フェーズの詳細は、実施日順にまとめた。地域のその他社会資源である東部区民館と小岩アーバンプラザで実施された第3回を図表3-12に、サテライト施設である江戸川区総合体育館プールで実施された第4回を図表3-13にまとめた。第4回を実施した日の午後には、えどがわパラスポーツアンバサダーを対象に、重度障害者のスポーツ支援についての研修会を開催した(図表3-14)。第5回は研修会に参加したパラスポーツアンバサダーの実践の場も兼ねて、サテライト施設である江戸川区総合体育館アーチェリー場で行った(図表3-15)。第6回、第7回は、第3回と同じ会場である東部区民館と小岩アーバンプラザでそれぞれ実施した(図表3-16、3-17)。最終回である第8回は、第4回と同会場の江戸川区総合体育館プールで実施した(図表3-18)。

図表 3-6 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)①

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年6月22日（土）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（平田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-7 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)②

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年6月29日（土）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（平田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-8 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)③

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年7月20日（土）
実施時間	14：45～15：45
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（吉野親子）
参加者詳細	吉野叶恋（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-9 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)④

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第1回
実施日	2024年8月12日（祝）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-10 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)⑤

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年8月25日（日）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（吉野親子）
参加者詳細	吉野叶恋（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-11 江戸川区モデルプログラム詳細(第1回／第2回)⑥

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第2回
実施日	2024年9月23日（祝）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	東京都障害者総合スポーツセンター プール
メイン指導者	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職） ・NPO法人ゆめけん
サポートスタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本パラスポーツ協会公認パラスポーツ指導員 ・江戸川区総合体育館スタッフ
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・入水、退水確認 ・水慣れ、水中での状態確認 ・歩行、ジャンプ、（ポールつかまって） ・背浮きの確認 ・泳法の体勢確認 ・泳力チェック ・状況に応じて個別対応
備考	東京都障害者総合スポーツセンターの既存教室「重度障害者のためのプールひろば」を活用

図表 3-12 江戸川区モデルプログラム詳細(第3回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第3回
実施日	2024年10月12日（土）
実施時間	<ul style="list-style-type: none"> ・【AM】10：00～11：30 ・【PM】14：00～15：30
実施会場	<ul style="list-style-type: none"> ・【AM】東部区民館 ・【PM】小岩アーバンプラザ
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士
見学	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸川区スポーツ振興課 ・江戸川区総合体育館スタッフ
参加親子	<ul style="list-style-type: none"> ・【AM】2組（平田親子、山田親子） ・【PM】2組（道解親子、吉野親子）
参加者詳細	<ul style="list-style-type: none"> ・【AM】平田友吾（8歳）／山田稟子（15歳） ・【PM】道解真人（16歳）／吉野叶恋（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用



江戸川区モデルプログラム
(第3回) @ 東部区民館

図表 3-13 江戸川区モデルプログラム詳細(第4回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第4回
実施日	2024年11月24日（日）
実施時間	9:00～12:00
実施会場	江戸川区総合体育館プール
メイン指導者	東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
サポートスタッフ	江戸川区総合体育館スタッフ
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・体調確認 ・着替え誘導 ・準備体操 ・入水対応 ・個別対応 ・退水対応 ・採暖 ・着替え確認 ・振り返り、フィードバック
備考	<p>本実践研究のために新規に作成したプログラム</p> <p>※平田親子、吉野親子は体調不良で欠席</p>



江戸川区モデルプログラム(第4回)
@江戸川区総合体育館プール

図表 3-14 江戸川区モデルプログラム詳細(えどがわパラスポーツアンバサダー研修会)

えどがわパラスポーツアンバサダー研修会	
施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施日	2024年11月24日（日）
実施時間	13：00～17：00
実施会場	江戸川区総合体育館研修室
講師	東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
講義内容	<ul style="list-style-type: none"> ・障害について ・運動への誘導 ・安全管理 ・コーディネート
参加者	えどがわパラスポーツアンバサダー14名
備考	えどがわパラスポーツアンバサダー向け研修会



えどがわパラスポーツアンバサダー研修会

図表 3-15 江戸川区モデルプログラム詳細(第5回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第5回
実施日	2024年12月15日（日）
実施時間	11：00～11：45
実施会場	江戸川区総合体育館アーチェリー場
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	4組（平田親子、吉野親子、道解親子、山田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）、吉野叶恋（15歳）、道解真人（16歳）、山田稟子（15歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「なかよし運動教室」を活用



江戸川区モデルプログラム(第5回)
@江戸川区総合体育館アーチェリー場

図表 3-16 江戸川区モデルプログラム詳細(第6回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第6回
実施日	2025年1月11日（土）
実施時間	10：00～11：30
実施会場	東部区民館
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士 えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加	1組（平田親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用 ※山田親子は体調不良で欠席



江戸川区モデルプログラム
(第6回)@東部区民館

図表 3-17 江戸川区モデルプログラム詳細(第7回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第7回
実施日	2025年2月8日（土）
実施時間	14：00～15：30
実施会場	小岩アーバンプラザ
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都理学療法士協会所属 理学療法士 えどがわパラスポーツアンバサダー 東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	1組（道解親子）
参加者詳細	道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ふうせん遊び ・フライングディスク ・ボッチャなど
備考	江戸川区の既存教室「パラスポーツ初心者教室」を活用 ※吉野親子は体調不良で欠席



江戸川区モデルプログラム(第7回)
@ 小岩アーバンプラザ

図表 3-18 江戸川区モデルプログラム詳細(第8回)

施設ネットワーク	【ハブ施設】東京都障害者総合スポーツセンター
	【サテライト施設】江戸川区総合体育館
	【地域のその他社会資源】小岩アーバンプラザ／東部区民館
実施回数	第8回
実施日	2025年3月20日（祝）
実施時間	9：00～12：00
実施会場	江戸川区総合体育館プール
メイン指導者	江戸川区総合体育館スタッフ
サポートスタッフ	東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）
見学	江戸川区スポーツ振興課
参加親子	3組（平田親子、吉野親子、道解親子）
参加者詳細	平田友吾（8歳）、吉野叶恋（15歳）、道解真人（16歳）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・体調確認 ・着替え誘導 ・準備体操 ・入水対応 ・個別対応 ・退水対応 ・採暖 ・着替え確認 ・振り返り、フィードバック
備考	本実践研究のために新規に作成したプログラム



江戸川区モデルプログラム(第8回)
@江戸川区総合体育館プール

(5) 江戸川区総合体育館プールにおける参加者フィードバック後の対応

1) 更衣室の広さ

【指摘事項】

車いすやバギーのままでの乗り入れや介助者の同行を想定すると、更衣室はもう少し広いとありがたい。横になって着替えられる台があると良い。簡易更衣室でも構ないので、重度障害者用に寝かせて着替えられるベッドがあると良い。

【対応策】

①簡易カーテン設置して、個室に変更した。あわせて、赤台を設置し、寝かせた状態でも着替えられるスペースを設置した。赤台は安全面を配慮して四方を補強した。

②採暖室に目隠しシートを貼り、更衣室として使用した。入口の段差はスタッフがフォローした。



更衣室に簡易カーテンを設置して個室に変更



寝かせた状態でも着替えられるように赤台を設置



採暖室に目隠しシートを貼り、更衣室として使用

2) シャワーの水温が不安定

【指摘事項】

多目的更衣室のシャワーの水温が不安定で、急に水になつたり熱くなつたりした。

【対応策】

シャワーの修理に時間を要するため、本プログラム中の使用は中止した。動線を変更して、強制シャワー(人感センターにより自動でシャワーが出るシステム)を利用するようにした。

3) 更衣室の段差

【指摘事項】

更衣室のシャワーに向かう際に段差があり、車いすでシャワーを浴びるのが難しい。

【対応策】

スタッフが段差部分のフォローをした。

※座談会での振り返り内容(P.49 参照)から、必ずしも良い対応だったとはいえない。

4) 更衣室の順番待ち

【指摘事項】

複数の障害者が利用する際に、一度に全員が更衣室に入って着替えができず、更衣室の順番待ちが発生した。待ち時間が長く身体が冷えてしまった。

【対応策】

①参加者が同じタイミングで退水して、更衣室の順番待ちにならないように指導者同士で意志疎通を図り、ひとりずつ退水できるようにタイミングをずらして調整した。

②簡易プールに温水を入れて暖を取れる場所を作り、体温の低下を防いだ。



簡易プールに温水を入れて
プール退水後の体温低下を防止



簡易プールへの移動をスムーズに
行えるよう赤台を設置

5) スタッフの経験不足

【指摘事項】

①プールサイドで使用する車いすの扱い方を十分に理解していないスタッフがいたように感じた。入退水のタイミングで非常に不安になった。

②入水時、身体が車いすからずれる感覚があった。

【対応策】

①スタッフ間でシミュレーションを複数回繰り返した。

②ベルトで固定して、身体がずれないように工夫した。



入水時の身体のズレを防ぐため、
プール用車いすにベルトを設置

6) 隙間からの冷気による室温低下

【指摘事項】

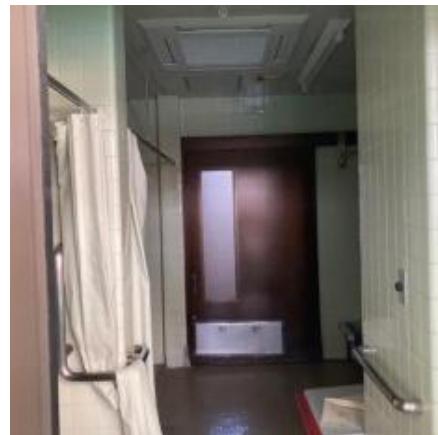
更衣室のドアの隙間や換気口から冷気が入ってきて、室温以上に体感温度が低かった。非常に寒くて、特に冬場は着替えるのが厳しい。

【対応策】

ドアの隙間をテープやビニール袋で覆うことにより冷気を遮断し、室温低下を防いだ。



更衣室のドアの隙間を
テープとビニールで防ぐ



冷気の侵入を防ぐために
ドアの換気口をテープで塞ぐ

7) 床が滑りやすい

【指摘事項】

更衣室の床がタイルで冷たい上に滑りやすくて着替えるのが危険だった。

【対応策】

すのこを設置して、肌が直接タイルに触れないようにした。

すのこの上に滑り止めシートを置き、濡れた足でも転倒しないように対応した。



更衣室の床に滑り止めを
置いたすのこを設置

(6) 江戸川区モデルプログラムまとめ

プログラムの特徴を以下 5 つにまとめた。

1) プログラムの活用

【第 1 回／第 2 回】

東京都障害者スポーツセンターが実施している「重度障害者のためのプールひろば」に本プログラム用に枠を設定して、各回 1 組の親子が 2 回ずつ参加した。

【第 4 回／第 8 回】

本プログラム用に江戸川区総合体育館プールプログラムとして新規に作成した。

【第 3 回／第 6 回／第 7 回】

江戸川区が実施している「パラスポーツ初心者教室」の参加対象を重度障害者まで広げて、本プログラム参加者が参加できるように調整した。

【第 5 回】

江戸川区総合体育館が実施している「なかよし運動教室」の参加対象を重度障害者まで広げて、本プログラム参加者が参加できるように調整した。

2) プールプログラム指導

【第 1 回／第 2 回】

東京都障害者総合スポーツセンターのプールを会場に、主指導を東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が担当し、江戸川区総合体育館スタッフが指導補助としてプールに入り、指導ノウハウを学んだ。

【第 4 回】

会場を江戸川区総合体育館プールに移動し、主指導は引き続き、東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が担当し、指導補助として江戸川区総合体育館スタッフがプールに入った。

【第 8 回】

会場は引き続き江戸川区総合体育館プールだが、主指導を江戸川区総合体育館スタッフが行い、指導補助として東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）が入った。

【第 4 回／第 8 回】

開催前に、江戸川区総合体育館プールに東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）、江戸川区総合体育館スタッフが集まり、受付、着替え、プールサイドの移動、入水、プール指導など、サテライト施設における重度障害者受入シミュレーションを行った。

3) スタジオプログラム指導

【第 3 回／第 5 回／第 6 回／第 7 回】

主指導を江戸川区総合体育館スタッフが行い、指導補助として東京都障害者総合スポーツセンター職員（専門職）、理学療法士、えどがわパラスポーツアンバサダーが入った。既存のプログラムに重度障害者を受け入れる際の注意事項について専門職から指導を受けた。

4) えどがわパラスポーツアンバサダー

日本パラスポーツ協会公認初級パラスポーツ指導員の資格を保有する江戸川区内で活動する地域ボランティアで、第5回以降のプログラム参加支援を依頼するため、第4回プログラム終了後に、実技と座学を含めた事前研修会（90分）を重度障害児向けの研修を専門職が実施した。

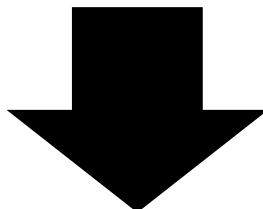
5) 担当制の導入

参加者の安全・安心を確保するため、参加親子を担当する江戸川区総合体育館のスタッフは、第1回から第8回まで変更せず、信頼関係の構築を進めた。

モデルプログラムの目的と成果は以下の通りである。

目的①

保護者と一緒に参加してもらい支援方法を経験してもらう。将来的には、ヘルパーなどへ支援方法を伝え、スポーツ活動の際にはヘルパーに同行してもらい保護者のレスパイト（日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る）につなげる。

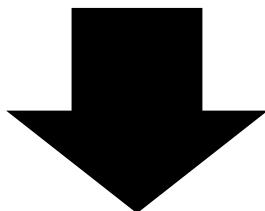


成果①

プールプログラムやスタジオプログラムに保護者が一緒に参加することで支援方法を経験できた。さらに、専門職が保護者に対して当事者シミュレーションを行ったことで、保護者のスポーツ支援方法の理解が深まり、スポーツ支援の重要性を再認識できた。保護者が体調不良でプログラムに一緒に参加できない際には、江戸川区総合体育館のスタッフが保護者役を務めた。その間、保護者はレスパイト（日頃の介護からのリフレッシュや負担軽減を図る）の時間を過ごすことができた。さらに、第三者であるスタッフと一緒に時間を過ごす経験を通じて、子どもの自立が育まれた。

目的②

東京都障害者総合スポーツセンターの職員（専門職）と江戸川区総合体育館のスタッフが一緒に指導することで、最終的に江戸川区総合体育館のスタッフが重度障害者を指導できるようにする。

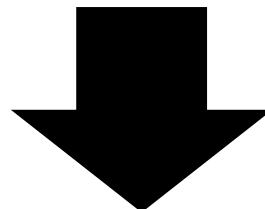


成果②

プログラムを通して、専門職と江戸川区総合体育館スタッフが同じ現場で一緒に指導できた。スポーツ指導と支援の経験が豊富な江戸川区総合体育館スタッフが、重度障害者へのスポーツ指導において、専門職からの指導、フィードバックの機会を複数回得られた。最終回では、江戸川区総合体育館スタッフが自信を持って重度障害者へのスポーツ指導を行った。

目的③

理学療法士が補助する区民館、コミュニティ会館の既存プログラムへの参加を通じて、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢を増やす。



成果③

東京都理学療法士協会に所属する理学療法士が、第3回、第6回、第7回にプログラム指導補助として参加した。主指導の江戸川区総合体育館スタッフと協力し、理学療法士としての専門性を生かしながら、当事者支援を行った。最終的には、本プログラム以外に江戸川区が開催するスポーツ教室（理学療法士も指導補助として参加）に本プログラムに参加する親子が参加する機会が生まれ、身近な地域でのスポーツ機会の選択肢が増えた。

(7) 江戸川区モデルプログラム座談会まとめ

江戸川区モデルプログラム関係者による座談会を開催した。当日は、2部構成として、第1部では参加親子4組、第2部では江戸川区総合体育館のスタッフを交え、それぞれ2024年度に実施したモデルプログラムを振り返った。

【第1部 出席者(所属は2024年度調査時。敬称略、五十音順)】

(参加者)

- ・ 道解真人(東京都立鹿本学園 高等部1年)／〈保護者〉道解麻由美
- ・ 平田友吾(〃 小学部2年)／〈保護者〉平田絢子
- ・ 山田稟子(〃 中学部3年)／〈保護者〉山田靖子
- ・ 吉野叶恋(〃 高等部1年)／〈保護者〉吉野純子

(専門職)

- ・ 佐々木ゆみ(東京都障害者スポーツ協会)
- ・ 屋敷可奈恵(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- ・ 小淵和也(笹川スポーツ財団)

【第2部 出席者(所属は2024年度調査時。敬称略、五十音順)】

(総体スタッフ)

- ・ 富永美千代(江戸川区総合体育館)
- ・ 原満梨絵(〃)
- ・ 山田勝之(〃)

(専門職)

- ・ 佐々木ゆみ(東京都障害者スポーツ協会)
- ・ 屋敷可奈恵(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- ・ 小淵和也(笹川スポーツ財団)

【第1部】

1) 東京都障害者総合スポーツセンターでのプールプログラム(第1回／第2回)

①施設面

(参加者)

- ・ 更衣室の着替えるスペースに余裕があった。
- ・ 濡れたままプールに入れる車いすがあり、移動が楽だった。
- ・ 車いすに乗ったまま入れるトイレが至る所にあり、安心できた。
- ・ 障害者専用のスポーツセンターがあることを知らなかった。来てみて、これほど素晴らしいとは思わなかった。(親として)、今後、子どもがひとりで通えるようになってもらえると良い。
- ・ 子どもが成長して身体が大きくなった時も、着替えるスペースが広いとありがたい。
- ・ プールサイドが一般のプールと比べて一段高いので入水しやすかった。
- ・ 採暖室があったのでプールから出た後に身体が冷えずに良かった。
- ・ 更衣室にはフルフラットの車いすのまま移動可能なスペースがあり、着替えはできそうだった。
- ・ 江戸川区から北区まで距離があり、移動中に子どもに緊張が入ってしまうので、ここでのプール参加は現実的に難しい。

(専門職)

- ・ プール用の車いすがあることや採暖室があることは、もっと周知をするべきだった。
- ・ 多くの人に、この場所について知ってもらう努力が必要と感じた。

②プログラム内容

(参加者)

- ・ 学校だとほかの生徒もいるのでプールに入れても 10~20 分程度。ここまで長い時間(40~60 分)プールに入ることはなかったので非常に楽しかった。
- ・ プールの授業は、入っている時間が短く、“水に浸かっている”感覚であったが、このプールプログラムでは、自分の手で前に進めた、“泳げた”感覚をはじめて味わえた。泳いだ満足感が得られて貴重な体験だった。その後、学校のプールの授業でもはじめて泳ぐ感覚が得られた。

(専門職)

- ・ このプールプログラムをきっかけに泳ぐ感覚を習得できて、学校でも体現できたのは非常にうれしい報告。この仕事をしていて本当に良かったと思えた。話を聞いて本当に感極まっている。
- ・ 子どもたちには、いろいろな可能性があると思うので、さらに多くの選択肢を提供していきたい。
- ・ 専門職の役割として、多くの選択肢を提供し、好きなことをやってもらいたいと思っている。自信を持ってもらい、日常生活にもつながるようになるとうれしい。それが専門職のやりがいである。
- ・ こうした座談会に参加する機会がなく、本音を聞くことがあまりないので、教室終了後は参加者のことを毎回心配していた。「泳げてうれしかった」との声を聞けたのは指導者冥利に尽きる。

2) 江戸川区総合体育館でのプールプログラム(第4回／第8回)

①施設面

(参加者)

- ・ 更衣室の着替えるスペース、座るスペースが若干狭かった。
- ・ 第8回で作ってもらった着替えるスペース(採暖室を更衣室として代替)は、広々としていて、ゆったりと着替えることができた。
- ・ 段差でスタッフが車いすをささえてくれたが、角度が急で身体が傾くのが不安だった。
- ・ 段差のたびにスタッフにささえてもらったが、その間、スタッフに時間を割いてもらうことになるので、親としては心苦しい気持ちになった。

- 複数のスタッフが常にサポートできる体制よりも、簡易でも構わないので、カーテンやシャワーをプールサイドにつけてもらったほうが気は楽である。
- 更衣室は完璧を求めすぎなくとも良いので、気兼ねなく自分のタイミングで着替えられるのが良い。簡易的な長いベンチを用意してもらえるだけでもありがたい。
- プール用車いすでは身体を固定するベルトが1本だけだった。体幹が弱いので1本で充分か不安だった。
- 1回目のプール(第4回)と2回目のプール(第8回)で、スタッフだけでなく、ハード面でも改善してくれた。採暖室を更衣室に変更したり、随所に工夫をしてくれてありがたかった。
- 更衣室のベンチが硬かったので、クッション性のあるものを敷いてもらえたと良かった。柔らかすぎると身体が倒れてしまうので調整が難しい。下半身の感覚がないため余計に不安になる。
- 顔が濡れるのが怖いので天井から出てくるシャワーは苦手だった。
- スロープから車いすで直接プールに入る体験がはじめてだったので怖かった。
- 身体を温めるための簡易プールをプールサイドに用意してくれた。プールで冷えた身体を温めてくれ非常に気持ち良かった。

(専門職)

- 1回目のプール(第4回)が終わった後、何度も江戸川区総合体育館のスタッフと打合せを重ねた。隙間風で寒いとの声があったので、養生テープで隙間を塞ぎ対応したり、一緒にアイデアを出し合って改善を重ねた。

②自立に向けて

(参加者)

- 将来を見据えた時、親としてはスポーツを通して、自分ができることを増やして欲しい。スポーツを楽しむのも重要だが、スポーツを通じて、何ができるのか、どういう風にできるのか、どう工夫すれば良いのか、に挑戦できると良い。
- 親としては自立が一番の目標。日頃から自分でできることは何かを考え、自信を得たり、成長するのが理想である。
- 社会に出ることを考えると、親以外の誰かに助けてもらう経験も必要。「手伝ってください」がいえるようになると良い。

(専門職)

- 自分でできることを増やすことを意識している。プールの場合、準備、入水、片付けなどを一貫して考えると、体力をどのように振り分けるのが良いかを自分で考えるようになる。テニスの場合、ボール出しをしてもらって打つだけではなく、自分で打ったボールを拾えるように促す。ボールを拾うための動作を学ぶことも重要である。プールに入る時間やプレーする時間は減少するかもしれないが、一連の流れを体験してもらって、できることを増やしてもらいたいと考えている。

3) 江戸川区内でのスタジオプログラム(第3回／第5回／第6回／第7回)

①プログラム内容

(参加者)

- 普段使わない筋肉を動かすので非常に疲れた。心地良い疲労感だった。
- 水分補給の時間が短かった。重度障害だとペットボトルから直接飲めるわけではない。時間がかかるので、それを想定してタイムテーブルを組んでもらえると良い。

②社会とのふれあい

(参加者)

- 普段は話すこともないご年配の方や、自分とは異なる障害の方と一緒にプログラムに参加して、

コミュニケーションが取れたのは良かった。

- ・先天的な障害であったり、中途障害であったりと、人によって障害が多様であることを学べた。自分たち以外にも障害者がいるってことを改めて認識できる機会になった。
- ・学校中心の生活で児童・生徒以外の人と触れ合う機会がなかったので良い経験になった。社会性を身に着ける上では、学校以外の人と触れ合はずは子どもの成長につながる。
- ・江戸川区に住んでいながら、江戸川区主催のスポーツ教室に参加したことがなかったので、今回のプログラムは非常に新鮮だった。

4) 江戸川区総合体育館スタッフの担当制の効果

(参加者)

- ・場所見知り、人見知りがあるので、回数を重ねて、毎回会って話をするなかで、信頼関係が築かれていった。
- ・最初は顔がこわばっていたが、徐々に自分から指導者に提案できるような関係が築かれていたので、親としてもみていて安心できた。
- ・人の大切さを再認識できた。どのプログラムにも、江戸川区総合体育館のスタッフがいて、毎回会うなかで、徐々に楽しめるようになってきた。

5) 東京都障害者総合スポーツセンターの専門職の存在

(参加者)

- ・安心感が非常に強かった。一人ひとりにしっかりと向き合ってサポートをしてくれた。このプログラムと一緒に楽しむ熱い思いを感じた。
- ・子どものいろいろな変化をみてくれて、会うたびに小さな変化まで伝えてくれた。前回の内容を踏まえたコメントがもらえたので、そこまで細かくみててくれたことがうれしかった。
- ・どのようにすれば良くなるかを真剣に考えてくれたのが伝わってきた。情熱が伝わってきたので、顔をみると安心できた。
- ・自分たちに直接関係する情報などいろいろと教えてもらえた。
- ・いつも笑顔で対応してくれたので安心できた。相談も気軽にできた。
- ・障害当事者の悩みごとや困りごとは正確に伝わらないことが多いが、専門職の人には少し状況を伝えただけで、悩みごと、困りごとの本質を瞬時に理解してくれた。こういう人たちに子どもたちを任せれば安心できる。

(専門職)

- ・プログラム内での専門職の役割は2点あった。ひとつは参加者に安心して楽しんでもらうこと、もうひとつが江戸川区総合体育館のスタッフの皆さんに事業の本質を理解してもらい、これをきっかけに継続してプログラムが実施できるためのお手伝いをすることであった。
- ・安心を提供できていたのなら本当に指導者冥利に尽きる。
- ・スポーツの場面に限らず、移動や着替えの際の行動、家族以外の大への対応など参加者が少しずつ成長している姿を見るのはうれしかった。
- ・個人の可能性を広げるためには、もっとできることはあったかもしれない改めて感じている。

6) モデルプログラムの振り返り

①他者とのかかわり

(参加者)

- ・今回のプログラムをきっかけに、行政担当者、江戸川区総合体育館のスタッフ、事務局担当者が、訪問リハビリテーションや医療リハビリテーションの現場をみたいと実際にきてくれて、子どもの状況を知ろうとしてくれたのはうれしかった。

- ・ 参加者それぞれの状況を理解し、どうすればできるのかを真剣に考えてくれたことがありがたかった。
- ・ 学校以外の施設でスポーツを経験できたのは、卒業後の人生のほうが長いことを考えると非常に有意義であったと思う。
- ・ 将来、自立していくにあたって、他人とコミュニケーションを取らずに生活するのは難しいわけで、学生時代に、生徒以外の人とコミュニケーションをとる機会が得られたのは、かけがえのない経験になった。
- ・ 看護師さんがいてくれたことで体調面の相談もできた。
- ・ パラスポアンバサダーを幼少期から知っていた。今回再会し、改めて人との出会いが財産になると感じた。成長を知ってもらい、声をかけてもらえるのはうれしい。

②自立・自信

(参加者)

- ・ 自身ができることを多く知ることができたはず。普段、親がみることのない姿をみることができて良かった。
- ・ 生まれてはじめて、水に浸かるのではなく、“泳ぐ”経験ができたのは子どもの自信につながる。親としては感動しかなかった。
- ・ さまざまな可能性を確認できたので、今後は他競技に挑戦したい。

③今後

(参加者)

- ・ 施設ネットワーク検討会議の時、現状を泣きながら訴えたことを思い出す。2年後に、こうしてプログラムを終えることができ、実際に成果がみてて感慨深い。江戸川区以外にも、このような取り組みが広がってもらうことを願っている。
- ・ 卒業後のスポーツ機会として、こうした環境が用意されているのはありがたいので、機会が増えてくることを願っている。



江戸川区モデルプログラム
参加親子4組による座談会

【第2部】

1) 東京都障害者総合スポーツセンターでのプールプログラム(第1回／第2回)

①施設面

(総体スタッフ)

- ・ 障害者専用のスポーツ施設なので、施設の至るところで障害者への配慮があり、大いに参考になった。
- ・ 更衣室が広く、着替えるには十分のスペースがあった。頭のなかで江戸川区総合体育館に置き換えながら、課題として持ち帰った。
- ・ プールサイドの滑りやすい部分にシートを敷いていた。工夫をすれば、江戸川区総合体育館でも対応可能だと感じた。

②プログラム内容

(総体スタッフ)

- ・ 参加者へのインテーク(初回相談)が充実していたのが印象的だった。
- ・ 参加者への配慮点、対応方法など、プールプログラムを一緒に行う関係者間での情報共有が徹底されていた。
- ・ ひとりで動けない参加者、発語が難しい参加者がいて、その人の思いをどう感じ取るかに興味があった。専門職は、顔色や肌の感覚、保護者へのヒアリングなど、本人との会話以外のコミュニケーションにも気を遣っていた。

(専門職)

- ・ 障害の程度が最重度と重度では状況がまったく異なる。たとえば、自分で少し身体をコントロールできる人とまったくできない人では異なるし、発語があるかないかでも変わってくる。一人ひとりで状況は異なる。経験でカバーできる部分もあるが、保護者に状況を聞く必要も当然ある。プロセスを間違えずに進めることが大切である。
- ・ 江戸川区総合体育館のスタッフに、東京都障害者総合スポーツセンターの施設をみてもらったのはイメージを膨らませる意味で良かった。実際にきて施設をみるのと、情報だけ知っているのとではまったく異なると思う。
- ・ 肌の質感、身体の緊張などは、動画をみたり、話を聞いただけではわからない。肌に直接触れたり、腕の持ち方を少し変えるだけで動きが変わってきたり、そのような変化を実際にプールに入ってみられたのは貴重な機会だった。

③学び

(総体スタッフ)

- ・ 一緒にプールに入っている保護者への配慮も素晴らしい。プールのなかで、どうすれば本人が気持ちよく楽しめるのかを、保護者の気持ちを考慮した上で伝えていた。専門職と同じ目線でプールに入らないと感じられなかつたことで、非常に大きな収穫だった。
- ・ 参加者の体調にあわせて、プールの入退水を行っていた。早くプールから上がる事がダメでもなく、遅れて参加することがダメなわけでもない。参加者が楽しめる適切な時間、身体が冷える前にプールから上がるなど、プログラム構成と参加者それぞれへの配慮が素晴らしい。
- ・ 発語がなく意思疎通が難しい人の場合、本当に自分がその人の意思を感じ取ることができるかは自信が持てなかつた。
- ・ 体幹がない子どもを抱っこする経験はなかつたので経験としては良かったが、実際に自分が指導するとなると、もっと経験をしていかないと怖い。

④対応力

(専門職)

- 自信がない、怖い、との感想は非常にポジティブな反応と捉えている。今回の経験だけで完璧な指導ができるようになるのは現実的に難しい。怖いと思うのは指導に真摯に向き合っている証拠。どこまでができて、どこからができないかを認識すること、怖い原因がどこにあるのかを分析し理解することが重要。このプロセスがないと、重度障害者への指導はできない。
- 身体から緊張が抜ける瞬間、逆に怖がって緊張が高まった瞬間、集中力が上がった瞬間など、発語がないからこそ、その瞬間と一緒に感じてもらう、触って確認してもらう経験は非常に大きい。こうしたプロセスのなかで、専門職と施設スタッフでの共通言語も増えてきて、より精度が上がるはず。
- 指導の引き出しを用意して臨むのは重要。その場では使わなくても、参加者の安全安心を担保するためには必要なスキルや経験である。その場の雰囲気や参加者によって提供できる引き出しが変わる。
- 安全安心は最低限のラインなので慎重になるのは理解できる。多くのシミュレーションを行い、多くの引き出しを準備してから現場で指導するのは思っている以上に難しい。
- 事前にメニューを作っていても、当日メニュー通りいかないことは多々ある。「これができないからこうしよう」ではなく、「これができそうだから、これをやろう！」と常に考えておくことで、その都度、メニューがマイナーチェンジして提供されていく。「これならできそう」「これならもうちょっとできるかな」とポジティブな考え方方が大切。

2) 江戸川区総合体育館でのプールプログラム(第4回／第8回)

①プログラム内容

(総体スタッフ)

- プログラム内容も、事前に組み立てた内容を、予行演習として施設スタッフと行うなかで、さらに意見が出てきて、当日まで施設スタッフみんなで考えて準備に進むことができた。

(専門職)

- 指導者同士の情報共有は参加者の情報共有もあるが、各指導者の得手不得手を含めたりスクのすり合わせの意味もある。
- プログラムを通して、きてくれた参加者に何を持って帰ってもらうか？いかに楽しんでもらえるか？またきたいと思ってもらえるか？を常々考えていた。ベクトルが同じ方向を向いていたからこそ、さまざまな工夫やアイデアが出て、声掛けがあって、内容のブラッシュアップに向けて活発な意見交換が行われたと思う。障害のある人は、不安な気持ちで施設を訪れる。迎える側に不安があると、それが一瞬にして伝わってしまう。今回、施設スタッフ全員が手を広げ、笑顔で迎え入れてくれる環境を作ってくれたので本当に良かったと思う。こうした仲間が江戸川区総合体育館にいるのが分かったことだけでも、専門職としては心強い。

②学び

(総体スタッフ)

- 参加親子がすべて同じメニューである必要はなかったので、各自の状況にあわせた。寒くないように、準備ができた参加者から準備体操をして入水していった。退水時、身体が冷えそうな人は早めに出て、もう少し頑張りたい人は長めにプールに入つてもらった。プールを最後まで楽しんでもらえるようなメニューを作ったので、臨機応変に対応できた。
- 江戸川区総合体育館のプールでできる内容について、第1フェーズで習ったことや経験したことを反映しながら、スタッフ間で意見交換を行い作成した。

- ・ 参加者の健康状態や水への慣れ具合などに応じて指導内容をすり合わせて提供できたのは良かった。
- ・ 指導者だけでなくサポートするスタッフ含めて、全員が同じ気持ちでプログラムを提供できたのは、今回の大きな収穫。参加者、保護者にばかり気を取られてもダメだと感じた。

(専門職)

- ・ 指導者の不安感は、参加者に伝わる。プールだと、直接、肌が触れるのでより伝わりやすい。

③チームワーク

(総体スタッフ)

- ・ 自分ひとりで考えるよりも、多くの人と考える方がさまざまな視点で意見が出て議論できる。今回は改めてそれを認識できた。
- ・ 更衣室の改善策ひとつをとってもさまざまな視点から議論ができたので改善内容の精度が上がった。
- ・ 施設スタッフ同士の信頼関係が構築できた。良い雰囲気でプログラムを提供できたのも、それが関係していると思う。他地域に展開するには施設スタッフの信頼関係は非常に重要なと思う。

(専門職)

- ・ 指導者の実績はさまざまなので、チームワークが非常に重要。現場では起こりうるすべてのことを想定して準備して臨む。準備万全でも想定外のことは起こる。だからこそ、指導者間のチームワーク、信頼関係は非常に重要なになる。
- ・ 主指導と指導補助に能力的な差があるわけではなく視点が異なるだけ。主指導が全体マネージメントしつつ、指導補助の性格や力量などを把握して調整する。指導補助は、水泳指導の能力はもちろんだが、参加者の障害特性を理解して、個別の指導に集中する。複数の参加者が同時にプールのなかで活動する場合、主指導、指導補助は役割分担を意識しつつ、チームワークが非常に重要なになる。
- ・ 第8回は専門職の出番がないほど信頼して任せられた。積み上げた信頼関係が形になった最終回だった。

3) プール指導

(総体スタッフ)

- ・ 会話以外のコミュニケーションが重要だと感じた。たとえば、身体の硬さ、柔らかさ。水に入つて怖いのかな？緊張しているのかな？皮膚がちょっと硬くなる感じが分かった。徐々に雰囲気に慣れてくると力が抜け、水温に慣れてくると皮膚が手に吸い付くような感覚になった。体重を指導者に預けてくれるようになる。微妙な変化だが変わるのが分かる。

(専門職)

- ・ 行って触って、怖さを感じる。このプロセスがあつてはじめて次のステップに進める。簡単に重度、最重度の障害者の指導ができるわけではない。指導の奥深さ、難易度の高さを認識してもらえたのは非常にありがたい。

4) チーム内での意思統一

①第1フェーズ

(総体スタッフ)

- ・ プログラム開始当初は、一部のスタッフだけが熱量をもって取り組んでいたが、プログラムを進めていくなかでスタッフの意識も変化して、積極的にかかわるスタッフが徐々に増えてきた。
- ・ 重度障害者の受入がはじめてで、スタッフ間でも不安のある人は多く、プログラムへの理解度もバラバラだった。

- ・ 第1フェーズを体験して、難易度の高さを実感できた。
- ・ 一緒にプールに入り触れることで指導の機微を感じることができた。モデルプログラムで求められている指導のレベルの高さを実感した。スタッフの共通認識として危機感が大きくなつた。
- ・ 第1フェーズの序盤は1~2名が東京都障害者総合スポーツセンターの見学・体験に行っていたが、終盤にはスタッフ自らが行きたいと立候補して、2~3名が見学・体験するようになった。

②第2フェーズ

(総体スタッフ)

- ・ 安全安心のプログラムを提供して楽しんで帰ってもらう、と実施期間中ずっと言い続けてきた。障害の有無にかかわらず、施設にきてもらった人に、プールって楽しいよね、泳ぐって楽しいよね、江戸川区総合体育館にきて楽しかったね、またきたいね、と思ってもらうにはどうしたら良いか？を常々考えている。そのためには、自分はどういう役割を果たすべきか、自問自答しながら、チームで考えてきた。最終回に、それが結実した。
- ・ 主指導、指導補助、監視で役割を分担した。第1フェーズを経て、担当割を微修正。総体プール(第4回)を経て、再度、担当割を修正した。

(専門職)

- ・ 最終回に向けて、一枚岩になって、同じ方向にベクトルをもっていく難しさを実感できた。施設運営の意味では同じ立場であり、尊敬している。本当に学ぶことばかりだった。
- ・ スポーツ施設職員の視点でみると、スポーツ活動を支援する、スポーツを通じて何かを伝えることについて参考になることばかりだった。
- ・ 目の前に当事者がいる環境で一緒に指導できたのは良かった。東京都障害者総合スポーツセンターでは、これだけ多くの障害者がスポーツをしていることをみてもらえたり、こういう障害があってもスポーツできることもみてもらったと思う。自分事化してもらう良いきっかけになったと思う。
- ・ 利用者に楽しんでもらう、またきたいと思ってもらうのは、どのスポーツ施設でも共通だと感じた。
- ・ 回を重ねるごとにスタッフの変化を感じていた。
- ・ 共通の目的、共通の思いがあるので、ネットワークがつながったと思うし、だからこそ、質問してもらったし、自分たちからも聞くことがあった。相互の関係があるからこそネットワークはつながるものなので、それを実感できた。

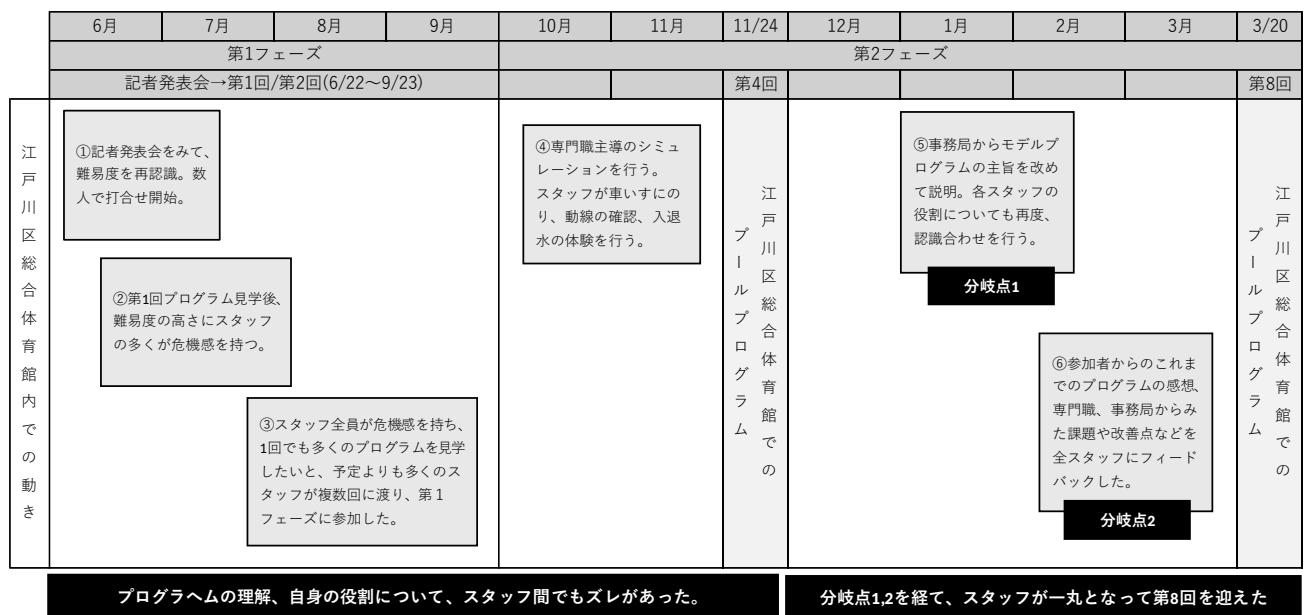
③2つの分岐点(図表3-19)

(総体スタッフ)

- ・ **【分岐点1】**プログラムの途中で、このプログラムの意義、各スタッフの役割の再認識をしてもらいたくて、事務局に依頼して、趣旨の全体共有、このプログラムで求められていることの再確認の機会を設けてもらった。主指導も指導補助も監視もスタッフ全員が重要である、全員が役割を全うしてはじめて、このプログラムは成功するのを、あの時点で確認できた。あそこが分岐点(1回目)だった。事務局からのフィードバックに対して、スタッフそれぞれが対応策を考えようになった。かかわり方が分からなかったスタッフも積極的にサポートするようになった。事務局とのやり取りを経て、自分がかかる意義、何をやれば良いのかを再認識でき、大きな自信を得られた。
- ・ **【分岐点2】**第8回開催の2か月前に、事務局よりこれまでの振り返りを含めて、厳しい指摘をされた。その通りだと思ったし、このままでは第8回は迎えられないと危機感が大きくなつた。スタッフ間で何度も話し合った。主指導、指導補助、監視と立場が異なり、みている視点も異なるので議論は白熱した。自分たちが水泳指導の専門家であることには自信を持つべきだと

思った。基本に返って水泳プログラムを考えた。その上で、重度障害者への指導で分からぬこと、できないことを整理した。そうすると、事務局からの厳しい指摘に対する解決策、対応策もみえてきた。ここが2回目の分岐点だった。

図表 3-19 江戸川区総合体育館スタッフの変化



出典：座談会内容をもとに作成

5) 江戸川区でのスタジオプログラムの振り返り(第3回／第5回／第6回／第7回)

(総体スタッフ)

- その場にいる全員が何をすれば楽しんでもらえるかを常に考えながらやっている。楽しいけれど、身体に刺激を入れないといけないし、身体に効いたと感じてもらいたい。
- 障害者向けのプログラムではあるが、同行している保護者にも効果のあるものを提供したいと考えている。もちろん配慮はするが、障害は気にせず、動かしにくい部分があれば代替案を提供して楽しんでもらおうと思った。
- 子どもたちからすれば、保護者が苦戦している姿を日常生活ではあまりみることがない。すぐ横で知らない大人が自分と一緒に楽しんでいる体験をすることもない。そういう意味でも、この光景を提供できたことは誇りに思う。

(専門職)

- 都度みてきたが、本当に指導がプロフェッショナルだった。毎回、当事者、保護者、我々も含めて巻き込んで楽しんで帰ってもらう、を体現していた。
- 知らない大人、家族や学校以外の関係者と接し、子どもたちには社会性を育むきっかけになったと思う。

6) 東京都障害者総合スポーツセンターの職員(専門職)の存在

(総体スタッフ)

- 今後、別のプログラムをはじめる際にも助言をもらいたい。我々も江戸川区総合体育館では指導者であり先生。「先生の先生」が専門職。安心感しかなかった。何かあったらフォローしてもらえるし、ささえてもらった。何もなかつたら大丈夫だよとの目線で寄り添ってもらった。

7) モデルプログラムの振り返り

(総体スタッフ)

- ・ プログラムを通して、スタッフ全体が成長できた。お互いの役割が整理できだし、細やかな部分の配慮がお互いにできるようになったし、普段の教室もやりやすくなった。プログラムのなかで糸余曲折して、互いの考えをぶつけ合うことができたから、より一層チームワークが良くなつた。
- ・ これで終わりではない。ここからが本当のスタートである。
- ・ 今後の継続が重要。新しく入ってくるメンバーにもこの経験、技術は伝えていくことで継続につながる。江戸川区総合体育館にはその責任があると思っているので、一過性のプログラムにならないように、スタッフが一丸となって対応していく。
- ・ 行政のかかわりが非常に重要だと感じた。後方支援、側面支援を至る所でしてもらって、本当に心強かった。行政の理解なくして、事業は進まないと実感した。

(専門職)

- ・ 行政担当者が毎回、プログラムに顔を出してもらったのはありがたかった。行政担当者の熱意で、地域の障害者スポーツ環境は大いに変わると感じた。
- ・ 専門職として自分たちが知っていることをすべて伝えるのが良いのか迷ったが、施設スタッフの頑張りをみていたら、そうじゃないと感じた。プログラム以外でもお互いにやり取りをしていて、そのなかでの電話やメール、立ち話など、至る所でのコミュニケーションがあつて、都度、お互いが知りたいこと、伝えたいことを本音で共有できたのが良かった。相互の意見交換で学びが多くつた。

2. 北九州市の障害者スポーツ振興における施設ネットワーク実践研究

(1) 北九州市モデルプログラム概要(2024年度)

モデルプログラムの目的は以下の通りである。

- 1) サテライト施設を会場に地域のその他社会資源の利用者に巡回スポーツ教室に参加してもらう。
- 2) アレアスが仲介役となり、SKETと地域の当事者がつながる機会を提供する。
- 3) SKETがハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源の施設をつなぐ潤滑油となり、地域のその他社会資源の施設においてSKET主導の指導につなげる。

3つの行政区(小倉南区、八幡東区、門司区)の主指導を北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)の会員から選定した(図表3-20)。モデルプログラムの実施概要は図表3-21にまとめた。

図表3-20 北九州市モデルプログラム 主指導者一覧(敬称略)

行政区	所属	氏名
小倉南区	北九州市障害者スポーツボランティアの会 (SKET)	小野真子
八幡東区	〃	松浦道子
門司区	〃	矢野敏弘

図表 3-21 北九州市モデルプログラム実施概要

グループ	フェーズ	回数	月日	時間	参加者数	会場	主指導	指導補助
小倉南区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/6/7(金)	10：30～11：30	45人	城野体育館	SKET 小野真子	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第2回	2024/10/4(金)	10：30～11：30	41人	城野体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第3回	2024/12/6(金)	10：20～11：20	20人	障害福祉サービス事業所リーシュ		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
八幡東区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/7/12(金)	13：30～14：30	9人	八幡東体育館	SKET 松浦道子	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第3回	2025/2/14(金)	13：30～14：30	16人	八幡東体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第2回	2024/10/21(月)	13：30～14：45	8人	多機能型事業所 ワンステップ		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
門司区 グループ	第1 フェーズ	第1回	2024/8/5(月)	13：00～14：00	13人	門司体育館	SKET 矢野敏弘	・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第2回	2024/10/7(月)	13：30～14：30	15人	門司体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
		第4回	2025/2/3(月)	13：30～14：30	14人	門司体育館		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ
	第2 フェーズ	第3回	2024/12/13(金)	13：15～14：15	16人	スマイル門司		・アレアス職員（専門職） ・SKETスタッフ

1) 小倉南区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-22の通りである。第1フェーズの第1回、第2回は、サテライト施設である城野体育館で実施、第2フェーズの第3回は地域のその他社会資源である障害福祉サービス事業所リーシュで実施した。

図表3-22 北九州市(小倉南区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回	実施回	第3回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	城野体育館	会場	障害福祉サービス事業所リーシュ

①参加者

小倉南区の障害福祉事業所(フラワー木町、障害福祉サービス事業所リーシュ、ファインズ ムービング)の利用者と各事業所職員が一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター・アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)登録の指導者とした。プログラム内容は、事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前に障害福祉サービス事業所リーシュを訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

2) 八幡東区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-23の通りである。第1フェーズの第1回、第3回はサテライト施設である八幡東体育館で実施、第2フェーズの第2回は地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップで実施した。

図表3-23 北九州市(八幡東区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第3回	実施回	第2回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	八幡東体育館	会場	多機能型事業所ワンステップ

①参加者

八幡東区の障害福祉事業所(多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠)の利用者と各事業所職員が一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)登録の指導者とした。プログラム内容は、事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前に多機能型事業所ワンステップを訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

3) 門司区グループ

第1フェーズから第2フェーズへの地域移行の概要は図表3-24の通りである。第1フェーズの第1回、第2回、第4回はサテライト施設である門司体育館で実施、第2フェーズの第3回は地域のその他社会資源であるスマイル門司で実施した。

図表3-24 北九州市(門司区)モデルプログラムにおける地域移行の概要

第1フェーズ		第2フェーズ	
実施回	第1回／第2回／第4回	実施回	第3回
施設形態	サテライト施設	施設形態	地域のその他社会資源
会場	門司体育館	会場	スマイル門司

①参加者

門司区の障害福祉事業所(スマイル門司)の利用者と事業所職員が一緒に参加した。

②プログラムの活用

北九州市障害者スポーツセンター アレアスが実施している「巡回スポーツ教室」を活用した。従来の教室は、主指導を専門職であるアレアス職員が行っていたが、本プログラムの主指導は北九州市障害者スポーツボランティアの会(SKET)指導者とした。プログラム内容は事業所職員と相談して決定した。

③指導体制

主指導のSKETスタッフは、これまでのSKETでの活動内容、およびプログラム終了後の地域での活動可能性を考慮してアレアスの専門職が選定した。指導補助のSKETスタッフは、SKET登録者から募った。指導補助のアレアス職員(専門職)は、従来の「巡回スポーツ教室」で主指導の経験がある職員を中心に選定した。アレアス所長が全プログラムに参加して、提供するプログラムの安全管理につとめた。

④事前ヒアリングの実施

第2フェーズを実施するにあたり、アレアス所長と主指導のSKETスタッフが事前にスマイル門司を訪れて利用できる道具や機材の確認、安全に活動できるように家具移動などを依頼した。加えて、参加予定者の状況や特徴について、事業所職員に確認した。

⑤担当制の導入

利用者との信頼関係の構築、安全・安心を確保する観点から、主指導のSKETスタッフは、第1フェーズ、第2フェーズと変更せずに実施した。

(2) 北九州市モデルプログラム詳細(2024年度)

北九州市モデルプログラムの詳細を各行政区で実施日順にまとめた。

小倉南区では、サテライト施設である城野体育館で行われた第1フェーズを図表3-25、3-26、地域のその他社会資源である障害福祉サービス事業所リーシュで行われた第2フェーズを図表3-27にまとめた。

八幡東区では、サテライト施設である八幡東体育館で行われた第1フェーズを図表3-28、3-30、地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップで行われた第2フェーズを図表3-29にまとめた。

門司区では、サテライト施設である門司体育館で行われた第1フェーズを図表3-31、3-32、3-34、地域のその他社会資源であるスマイル門司で行われた第2フェーズを図表3-33にまとめた。

【小倉南区グループにおける目標】

- ①小倉南区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-25 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワーモード、ファインズ ムービング
実施回数	第1回
実施日	2024年6月7日（金）
実施時間	10：30～11：30
実施会場	城野体育館
メイン指導者	SKET：小野真子
サポートスタッフ	SKET：4名／アレアス：3名
参加人数	45名
参加内訳	障害者：34名／事業所職員：11名（3施設合計）
障害種別内訳	知的障害：31名／精神障害：3名
年齢区分	18～64歳：34名
居住地区	門司区：1名／小倉北区：11名／小倉南区：21名／八幡東区：1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・玉入れ ・休憩 ・卓球バレー ・整理体操
備考	玉入れは、①各施設2列に並んで2球ずつ玉入れ、②施設ごとに、全ての紅白玉を5つのゴールに入れ、時間を競った（2回ずつ実施）。

図表 3-26 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワー木町、ファインズ ムービング
実施回数	第2回
実施日	2024年10月4日（金）
実施時間	10：30～11：30
実施会場	城野体育館
メイン指導者	SKET：小野真子
サポートスタッフ	SKET：3名／アレアス：3名
参加人数	41名
参加内訳	障害者：32名／事業所職員：9名（3施設合計）
障害種別内訳	肢体不自由：1名／知的障害：30名／精神障害：1名
年齢区分	18～64歳：32名
居住地区	門司区：1名／小倉北区：7名／小倉南区：22名／八幡東区1名／北九州市外：1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操、ストレッチ ・玉入れ ・休憩 ・ボール遊び ・フライングディスク ・整理体操
備考	<p>ラジオ体操・ストレッチは、新聞で作った棒を使っての体操・ストレッチを行った。</p> <p>ボール遊びは、2人1組でタオルにボールを乗せて実施後、1列になりボールを後ろに手渡しで回した。</p> <p>フライングディスクは、コーンを狙って当てるようにした。</p> <p>参加施設で人数にバラつきがあったため、合同でチームを作り競技を行ったが、スムーズに行えた。</p>

図表 3-27 北九州市(小倉南区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	小倉南区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】城野体育館
	【地域のその他社会資源】障害福祉サービス事業所リーシュ、フラワー木町、ファインズ ムービング
実施回数	第3回
実施日	2024年12月6日（金）
実施時間	10：20～11：20
実施会場	障害福祉サービス事業所リーシュ
メイン指導者	SKET：小野真子
サポートスタッフ	アレアス：2名
参加人数	20名
参加内訳	障害者：16名／事業所職員：4名（リーシュのみ参加）
障害種別内訳	知的障害：16名
年齢区分	18～64歳：16名
居住地区	門司区：1名／小倉南区：14名／八幡東区：1名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操、ストレッチ ・休憩 ・ボール渡し ・ラダーゲッター ・整理体操
備考	<p>ボール渡しは、様々な渡し方で2チームに分かれて速さを競った。</p> <p>ラダーゲッターは、チーム対抗戦で実施した。1人3回まで順番に投げ、合計2回戦まで行った。</p>



北九州市モデルプログラム
(小倉南区) @ 城野体育館



北九州市モデルプログラム
(小倉南区)
@ 障害福祉サービス事業所リーシュ

【八幡東区グループにおける目標】

- ①八幡東区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-28 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	<p>【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス</p> <p>【サテライト施設】八幡東体育館</p> <p>【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠</p>
実施回数	第1回
実施日	2024年7月12日（金）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	八幡東体育館
メイン指導者	SKET：松浦道子
サポートスタッフ	SKET：3名／アレアス：3名
参加人数	9名
参加内訳	障害者：6名／事業所職員：3名
障害種別内訳	知的障害：6名 ※車いす（+装具）参加者：2名
年齢区分	18～64歳：6名
居住地区	小倉南区：1名／若松区：1名／八幡東区：1名／八幡西区：3名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・ボッチャ ・休憩 ・フライングディスク ・ディスゲッター ・整理体操
備考	<p>ボッチャは、競技説明後、3対3のチーム戦で2回戦実施した。</p> <p>フライングディスクは、約4mの距離から3枚ずつ投げ、枠に入った枚数をチーム戦で競った。</p> <p>ディスゲッターは、約4mの距離から3枚ずつ投げ、的を射抜いた枚数をチーム戦で競った。</p> <p>空調設備がなく、水分補給に細心の注意を払った。</p>

図表 3-29 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】八幡東体育館
	【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠
実施回数	第2回
実施日	2024年10月21日（月）
実施時間	13：30～14：45
実施会場	多機能型事業所ワンステップ
メイン指導者	SKET：松浦道子
サポートスタッフ	アレアス：1名
参加人数	8名
参加内訳	障害者：5名／事業所職員：3名
障害種別内訳	知的障害：5名
年齢区分	18～64歳：5名
居住地区	八幡東区：5名
実施内容	<p>(第1グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・ストレッチ ・リズム体操 <p>(第2グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・ストレッチ ・リズム体操
備考	同敷地内の2施設で前半、後半に分けて実施した。

図表 3-30 北九州市(八幡東区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	八幡東区
施設ネットワーク	<p>【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス</p> <p>【サテライト施設】八幡東体育館</p> <p>【地域のその他社会資源】多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠</p>
実施回数	第3回
実施日	2025年2月14日 (金)
実施時間	13:30~14:30
実施会場	八幡東体育館
メイン指導者	SKET: 松浦道子
サポートスタッフ	SKET: 2名 / アレアス: 3名
参加人数	16名
参加内訳	障害者: 11名 / 事業所職員: 5名
障害種別内訳	知的障害: 11名
年齢区分	18~64歳: 11名
居住地区	八幡東区11名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・館内ウォーキング ・休憩 ・卓球バレー ・ふうせんバレー
備考	場面転換の時間を節約するため、参加者来場前に、卓球バレーとふうせんバレーの会場設営を事前に行った。



北九州市モデルプログラム
(八幡東区) @ 八幡東体育館



北九州市モデルプログラム
(八幡東区)
@ 多機能型事業所ワンステップ

【門司区グループにおける目標】

- ①門司区を中心とした障害者にスポーツ・レクリエーション活動に親しむ機会を提供する。
- ②対象事業所で日常的にスポーツ・レクリエーション活動に取り組めるプログラムを提供する。

図表 3-31 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第1回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第1回
実施日	2024年8月5日（月）
実施時間	13：00～14：00
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET：矢野敏弘
サポートスタッフ	SKET：1名／アレアス：2名
参加人数	13名
参加内訳	障害者：10名／事業所職員：3名
障害種別内訳	肢体不自由：1名／精神障害：9名
年齢区分	18～64歳：10名
居住地区	門司区：10名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・ボッチャ（1試合目） ・休憩 ・ボッチャ（2試合目） ・ボッチャ（3試合目）
備考	スマイル門司の利用者がボッチャ大会に出場する予定であるため、大会に向けた練習を兼ねてボッチャを実施した。競技説明後、3名1チームで対戦組み合わせを変えながら、チーム戦を行った。

図表 3-32 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第2回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第2回
実施日	2024年10月7日（月）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET：矢野敏弘
サポートスタッフ	SKET：1名／アレアス：2名
参加人数	15名
参加内訳	障害者：12名／事業所職員：3名
障害種別内訳	肢体不自由：1名／知的障害：3名／精神障害：8名
年齢区分	18～64歳：11名／65歳以上：1名
居住地区	門司区12名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・フライングディスク（ディスクの投げ合い） ・フライングディスク（アキュラシー投てき練習） ・休憩 ・フライングディスク（ディスタンス投てき練習）
備考	スマイル門司の利用者がフライングディスク大会に出場する予定であるため、大会に向けた練習を兼ねて実施した。競技説明後、アキュラシー、ディスタンスの練習をそれぞれ行った。

図表 3-33 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第3回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第3回
実施日	2024年12月13日 (金)
実施時間	13：15～14：15
実施会場	スマイル門司
メイン指導者	SKET：矢野敏弘
サポートスタッフ	アレアス：4名
参加人数	16名
参加内訳	障害者：13名／事業所職員：3名
障害種別内訳	肢体不自由：1名／知的障害：4名／精神障害：8名
年齢区分	18～64歳：12名／65歳以上：1名
居住地区	門司区13名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・準備体操 ・卓球バレー（1試合目） ・休憩 ・卓球バレー（2試合目） ・卓球バレー（3試合目）
備考	普段、集団行動が苦手な利用者も、チームメートと一緒に席に座り、卓球バレーを楽しんだ。試合を重ねるごとに力加減が身に付いてきた。

図表 3-34 北九州市(門司区)モデルプログラム詳細(第4回)

対象地区	門司区
施設ネットワーク	【ハブ施設】北九州市障害者スポーツセンター アレアス
	【サテライト施設】門司体育館
	【地域のその他社会資源】スマイル門司
実施回数	第4回
実施日	2025年2月3日（月）
実施時間	13：30～14：30
実施会場	門司体育館
メイン指導者	SKET：矢野敏弘
サポートスタッフ	アレアス：2名
参加人数	14名
参加内訳	障害者：11名／事業所職員：3名
障害種別内訳	肢体不自由：1名／知的障害：2名／精神障害：8名
年齢区分	18～64歳：10名／65歳以上：1名
居住地区	門司区11名
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・スクエアボッチャ（1試合目） ・スクエアボッチャ（2試合目） ・休憩 ・スクエアボッチャ（3試合目） ・スクエアボッチャ（4試合目）
備考	競技への興味があり、積極的に参加していた。競技進行を優先したため盛り上がりに欠ける場面があった。ルールを理解して投げる参加者が少ないように感じた。☒



北九州市モデルプログラム
(門司区) @ 門司体育館



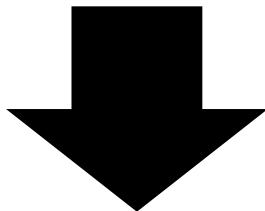
北九州市モデルプログラム
(門司区) @ スマイル門司

(3) 北九州市モデルプログラムまとめ

モデルプログラムの目的と成果は以下の通りである。

目的①

サテライト施設を会場に地域のその他社会資源の利用者に巡回スポーツ教室に参加してもらう。



成果①

小倉南区では、サテライト施設である城野体育館を会場に、地域のその他社会資源であるフラワー木町、障害福祉サービス事業所リーシュ、ファインズ ムービングの3施設の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

八幡東区では、サテライト施設である八幡東体育館を会場に、地域のその他社会資源である多機能型事業所ワンステップ、アベック戸畠の2施設の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

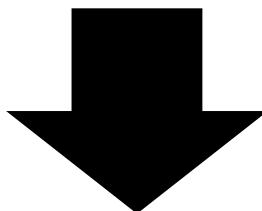
門司区では、サテライト施設である門司体育館を会場に、地域のその他社会資源であるスマイル門司の利用者が巡回スポーツ教室に参加した。

目的②

アレアスが仲介役となり、SKETと地域の当事者がつながる機会を提供する。

目的③

SKETがハブ施設、サテライト施設、地域のその他社会資源の施設をつなぐ潤滑油となり、地域のその他社会資源の施設においてSKET主導の指導につなげる。



成果②③

従来、アレアスの専門職が担っていた巡回スポーツ教室の主指導を、SKETスタッフに変更した。主指導者の変更により、これまで専門職が行っていたプログラム実施前の事業所への事前訪問や事業所職員との意見交換をSKETスタッフが年間を通して主導したことにより、各行政区においてSKETスタッフの存在と役割を認識してもらった。SKETスタッフとプログラム参加者が複数回のプログラムを通じて一緒に時間を過ごしたことで安心感が生まれた。各事業所・SKET・アレアスと信頼関係が構築されたことで次年度以降の活動を滞りなく行える土壌ができた。

(4) 北九州市モデルプログラム座談会まとめ

北九州市モデルプログラム関係者による座談会を開催した。北九州市障害者スポーツボランティアの会 SKET スタッフ、および北九州市障害者スポーツセンター・アレアスの専門職に、それぞれ2024年度に実施したモデルプログラムを振り返ってもらった。

(北九州市障害者スポーツボランティアの会 SKET)

- ・ 小野真子(主指導者)
- ・ 松浦道子(〃)
- ・ 矢野敏弘(〃)
- ・ 田中龍二(指導補助)
- ・ 柚原ゆかり(〃)

(専門職)

- ・ 有延忠剛(北九州市障害者スポーツセンター・アレアス)
- ・ 山下悟(〃)
- ・ 都留有香(〃)
- ・ 池永いずみ(〃)
- ・ 宮崎賢人(〃)
- ・ 古園美久(〃)
- ・ 近藤久子(〃)
- ・ 中溝友里亜(〃)
- ・ 間所章治(〃)
- ・ 亀井琉以奈(〃)

(ファシリテーター／事務局)

- ・ 小淵和也(笹川スポーツ財団)

●小倉南区

(SKET)

- ・ SKET スタッフが主指導になるのは新しい試みである。
- ・ これまでアレアス専門職が巡回スポーツ教室の主指導だったので、その時の指導内容を参考にして臨んだ。
- ・ 開始前にタイムスケジュールを作るが、参加者の状況やその日の雰囲気などにより、予定通りにはいかないことが多い。臨機応変に対応しているが、良いのか悪いのか不安はある。
- ・ これまで自分が担当したグループだけをみていれば良かったが、主指導者になると全体をみなければならない。複数グループが同時に動くので、全体の動きに気を付けた。
- ・ 身体を動かすことを楽しんでもらいたい。今日も楽しむ気持ちで参加している。
- ・ SKET スタッフとして長年一緒にやっているので、その日のサポート体制をみて、自分の役割を認識して動くようにしている。主指導者の指示を聞きつつ、指導補助としてどう動くべきかを観察しながら動いている。

(専門職)

- ・ 臨機応変に対応するスキルは非常に重要。その場の雰囲気にあわせて対応したのは良かった。支援学校、支援学級での勤務経験が生きていると感じた。
- ・ これまで自分が主指導をやっていたので、今回のモデルプログラムで指導補助として参加する場合も、どうすれば主指導者がスムーズに進行できるのかを予測しながら参加できた。
- ・ SKET の主指導者は、過去の教員経験をもとに指導を行っており、今回指導補助として入れるのを楽しみにしていた。実際に非常にスムーズな進め方で、参加者とのコミュニケーションひとつとっても、本当に勉強になる時間だった。
- ・ 参加者の動きもみながら、主指導者の動きも観察していた。自分が別の教室の主指導をやる際の参考にしたいと思った。
- ・ モデルプログラムでは、指導者全員でフィードバックの機会を設けて、お互いの振り返りをする時間があった。振り返る時間を設けてもらったことで、その日の学びが深くなかった。

●八幡東区

(SKET)

- ・ 北九州市の障害者スポーツ教室にかかわって15年。指導補助として、これまで楽しく参加してきた。主指導ははじめての経験。人前で指導するのは苦手。
- ・ 初回は人見知りもあってか、参加者が少しパニックになるシーンがあった。どうかかわってあげるのが良いかを考えながら接していた。最終回で参加者の様子が初回とはまったく変わっていたのはうれしかった。
- ・ 主指導者の声掛けが心地よく、参加者は、あの声掛けで落ち着けたのだと思う。
- ・ サポートスタッフ同士でも情報共有を行い、主指導者がスムーズに進められるよう意識した。

(専門職)

- ・ 第1回は参加者がパニックになり、どうなるか心配であったが、回を重ねるなかで落ち着き、顔見知りの指導者が増えてきたことで、落ち着いてきたように思う。信頼関係が構築されたと思う。継続していく重要性を再認識できた。
- ・ 参加者がひとりでポツンとしている時には、すぐに駆けよって声掛けしたり、グループ分けも、その日の参加者の関係性をみて分けていた。
- ・ 参加する事業所の特徴やその日の参加者の雰囲気などで教室の雰囲気は大きく変わる。都度、その確認をしながら、対応していたのは素晴らしい。
- ・ 今日は主指導ではなく指導補助としての役割だったので、同行する事業所職員とコミュニケーションを取り、参加者の当日の体調などの情報収集につとめた。
- ・ ふうせんバレー用に事前にポールを立てネットを貼って会場準備を行った。ただ、当日の参加者の様子をみて、対戦形式は難しそうとすぐに判断して、円陣を組んでボールを落とさないゲームに変更したのは素晴らしい。事前に準備したものを使いがちだが、経験則から瞬時に変更したのは良かった。
- ・ 主指導を経験することで、これまでとは別の視点で教室をみることができるとと思う。研修ではない実践現場での経験は貴重である。
- ・ 参加者がパニックになった時も笑顔を絶やさずに対応していた。参加者への愛情の深さを感じた。
- ・ 個別指導ではなくグループ指導なので、チームでの対応が重要である。臨機応変にチームワークが発揮されていたのを見ることが出来て良かった。さらに質を上げていけるように感じた。

●門司区

(SKET)

- ・ 北九州市の障害者スポーツ教室にかかわって約 25 年。これまで指導補助としてプログラムにかかわっていたが、今回は主指導者で責任感がまったく違った。
- ・ 参加者に楽しんでもらうこと、喜んでもらうことを一番に考えた。プログラムのタイムマネジメントも気とした。主指導、指導補助、どちらの立場も理解したので、今後の教室運営支援の心構えも変わる。
- ・ 参加者の態度、目、顔をみながら楽しんでいるかどうかを判断した。
- ・ フライングディスクは、どうしてもひとりで投げている時間が多いで、あまり盛り上がらなかった。ボッチャや卓球バレーは対戦形式にできたので盛り上がった。
- ・ 参加する事業所の状況や参加者の障害特性にもよるが、今回は、卓球バレーやスクエアボッチャなど、参加者が一緒に参加できる競技を楽しんでいた。
- ・ 事業所で行う日常活動とは別の顔をみせていると事業所職員から聞いた。そういう一面をみせてくれたのはうれしい。実施した甲斐があった。これが巡回スポーツ教室の良さ。
- ・ 門司区の参加者は競技を真剣にやりたい人が多かった。真剣にやっていたから、盛り上がっていないようにみえたが、ボッチャやフライングディスクは、本気で大会に出ようと思って、参加していると思う。ディスクを遠くに飛ばす参加者に「全スポ(全国障害者スポーツ大会)に出場できるかもよ」と声を掛けたら非常に喜んでいた。やはり、真剣に取り組んでいたのだと思う。

(専門職)

- ・ 役割分担を意識した。競技を真剣にやりたい参加者だったので、審判の役割に徹した。
- ・ 卓球バレーは事業所職員の人も気に入ったようで、後日、道具を借りにきて、事業所でやっていた。良いきっかけになったと思う。
- ・ 事業所職員いわく、事業所の日中活動ではあそこまで喜びをみせない参加者が、プログラム参加時には喜びをみせていました。別の顔があることを認識したと驚いていた。
- ・ 主指導者との意思疎通はもっとするべきだったと反省している。主指導者の意図を十分に理解できていなかったかもしれない。

●全体を通して

(専門職)

- SKET スタッフは経験が豊富なので任せすぎたところはあったかもしれない。もう少しコミュニケーションを取れれば、もっと良い教室になっていた可能性があり、反省点である。
- プログラムの本来の目的は、「非日常を体験する」である。もし、このプログラムに参加していなければ、事業所で日中作業をやっていた時間。その時間を使って教室を行うわけなので、気分転換になったり、リフレッシュできたり、健康増進につながったり、さまざまな目的が存在する。楽しむのは当然大切だが、非日常を体験することやマンネリ化しないことが重要である。
- 門司区では競技性を重視したプログラムになったが、これも非日常の視点では問題ないと考えている。だからこそ、参加者は日頃みせない別の一面を見せた。
- SKET スタッフに主指導をお願いしたことでのみえてきた景色、アレアス専門職が指導補助として入ったことでみえた景色が、それぞれあると思う。これまでと異なる立場でかかわることで、それぞれが指導の幅が広がったと思う。



北九州市モデルプログラム座談会